Gerhard Richter 展を観て

松井 敦子

Gerhard Richter 展

ドイツの現代画家ゲルハルト・リヒター（90 歳、画歴 60 年）の個展が昨秋、開催されて最重要作品の超大作 Birkenau 他 110 点の展示があった。

リヒターは 1932 年ドレスデン生まれで青年期をナチスや共産主義体制下のドイツで過ごしたことでドイツの歴史が制作の中心的なテーマになっている。50 年代初頭、ドレスデン芸術アカデミーで社会主義リアリズム絵画の教育を受けた後、西ドイツに渡りデユッセルドルフ芸術アカデミーに入学。60 年代は資本主義リアリズムと同時に新聞や雑誌の写真をぼかしてキャンバスに描いたフォト・ペインティングや色見本のようなカラーチャート、70 年代には色彩を何重にも重ねた絵画のアブストラクトペインティングなど絵画の可能性を問う作品で世界的な評価を得ている。油彩画、写真、デジタルプリント、ガラス、鏡など多岐にわたる素材を用い具象表現と抽象表現を行き来しながら、人がものを見て視覚そのものではなく認識する原理そのものを表すことに一貫して取りくみ続けてきた。ものを見るとは単に視覚の問題ではなく芸術の歴史、ホロコースト等を経験した 20 世紀ドイツの歴史、画家自身やその家族の記憶、我々の固定観念や見ることへの欲望などが複雑に絡み合った営みであることをリヒターが生み出した作品群を通じて感じとることができる。

芸術家にとって表現の自由とは何か

戦後直ぐに発表された、第二次世界大戦あるいはアウシュビッツという犯罪を引き起こした「罪」をドイツそのものに問うた最初の哲学的論考カール・ヤスパースの「形而上的な罪」は戦後のドイツに通奏低音として流れている。戦後ドイツに課せられた戦争犯罪という負のイメージが美を扱う芸術にのしかかる重さ、イメージの絶望的な重さ、戦後の文化の葛藤をドイツ人芸術家として抱えていた。絵画あるいは写真という手段によってホロコーストの記憶が説得力を持って表現可能か否かという問いへの回帰もあった。

リヒターは 1980 年代に「あのような過去を持ったドイツでは何も生み出せないと思った。」と語っている。

アウシュビッツ第一収容所は強制労働収容所だが第二収容所（ビルケナウ）は絶滅収容所であった。リヒターは 1960 年代に[ビルケナウのガス室から囚人が外部に知らせるために命懸けで撮った 4 枚の残酷な写真]を知りアポリア(＊1)としてずっと向き合ってきた。（その囚人も受け取ったレジスタンスも処刑されている。）リヒターはアウシュビッツを何点か手掛けている。

そして 50 年以上もの時間をかけて、ついに真正面から取り組んだアウシュビッツとイ

メージが超大作ビルケナウである。リヒターは 1 枚の残酷な写真をフォト・ペインティングの手法で超大作に描き起こして制作を始めたが具象表現には耐えられなかったのかスキージ(＊2)をかけて様相を一変させた抽象表現となったようだ。

大作ビルケナウ

今回の展覧会はリヒター自らが会場の模型を作り展示プランを構想するなど意欲的に準備を進めた。６０年の画業の到達点の作品、光と影に向き合い続けてきたリヒターの絵には何が写っていてどんな光を放っているのだろうか。

広い会場に入ると正面に 260 ㎝×200 ㎝の同じ手法の油彩画が 4 枚ならんでいる。背面に全く同じ油彩画のコピー260 ㎝×200 ㎝ 4 枚がならんでいる。私はこの絵に囲まれてしまうのだ。そして奥の壁には小さくて良くみえなかったがあの恐ろしい残酷な写真が 4 枚並んでいる。

油彩は全体として薄墨色に見えた。暗い感じの絵だがもの凄い迫力でその前にいるのが耐えがたいほど押してくる。薄墨色の縦横に走るスキージの上に赤の太いスキージ、緑も少しスキージされてその強烈な色が押し寄せる衝撃、威圧感、無力感、閉塞感、リヒターの思いが重なって即座に受けとめることができない。これをどう受けとめればよいのか、茫然と立ち尽くしてしまう。抽象画を観てこのような感情をいだいたことは初めてである。

制作の過程をみると写真から描き起こして２週間で白黒のフォト・ペインティングを制作。その５日後には地がペールオレンジになる。翌日には建物の影を黒で描き始めるがはっきりとしなくなる。９日後、赤の太いスキージが４本入り、何が描かれているか分からなくなる。翌日は緑のスキージが入り完全に抽象画になった。11 日後、濃い薄墨色、白色が縦横にスキージされて元のペールオレンジ、赤、緑は奥に引っ込んでしまった。こうして 260 ㎝×200 ㎝ 4 枚となった。

終わりに

1960 年代に始まるリヒターのアウシュビッツをめぐる取り組みがビルケナウに到達した。これまで人間というものを限定していた法、政治、神を超えたところ、そうした地点にたどり着いた時、この問題がいまだ未解決のままこの時代にまで届いていることも改めて認識される。リヒターはアリストテレス哲学のアポリアであるとしている。人間が人間を支配するのは最も恐ろしいことであるとし、現代社会がはらんでいるものに繋ごうとしているように思う。

一方、私は自分の中学時代を思い出していた。図書委員仲間内で「今度、凄い本が入ってきた」と噂していたので私も見せてもらったのが精神医学者フランクルの[夜と霧]初版本だった。わたしはまず１ページめの残酷な写真を見て恐ろしさに震え上がった、原題は[強制収容所におけるある心理学者の体験]である。彼が冷静に観察を続けて、「肉体的より先ず精神的に疲弊してしまって命を落とす人が多いこと」を見つめた記録におどろき、心の中に

深く楔を打ち込まれてしまった。フランクルの凄い生き方、精神力の強さは何だろう。絶望の中でも希望は失わず、豊かな感受性は失わず自分を失わず、人に惑わされず、鈍感力を持って、謙虚に生きるフランクルに少しでも近づきたいと思ったけれど私にはとても無理だった。今でもそのような生き方、に近づきたいと思っている。

その後、女子の間で[アンネの日記]が流行ったので私も読んだ。おませな女の子の日記の中のおしゃべりは続く。創造性を失わず大人たちの中で自分の役割をわきまえているようだった。後日、アムステルダムのアンネの隠れ家を見学したが、現場を見てどんなに大変だっただろうかと思った。本棚の後ろの階段を上がった部屋は狭く、3 家族が住んでいたと思えない広さだった。声を潜めて、音を出さないようにしても水回りは音がするのでは、など心配してしまった。日記の伸びやかさは感じなかった。本当はもっともっと辛かっただろうに。リヒターは[アンネの日記]の表紙絵を描いているが、一人の少女だけのためにはと完成させていない。

人類愛の本質を分析したフロムは、ヒトラーのような独裁者が生まれてファシズム国家が生まれたかというと、結局は国民たちが自分で望んで作り上げた人間の行動原理の中にある、現代を生きる人はすべてが抱えている心の問題であるとしている。

フランクル・アンネ・フロム・すべて敗者の作品は以前から見てきた。今回、視点の差はあるものの勝者のリヒターが罪悪感を持って苦悩し 50 年を経てその思いを大作と成して世に出したことは意義深いことだと思った。

[注釈]

＊1）アポリアとは、哲学的難題、又は困難な状態のこと。

＊2）スキージとは、ゴムやプラスチックの刷毛で、表面の空気や水分を取り除く道具。

・Gerhard Richter 展：2022 年 6 月 7 日~10 月 2 日　国立近代美術館

・参考文献

GERHARD RICHTER　MARIAN GOODMAN GALLERY

ゲルハルト・リヒター　　青幻社

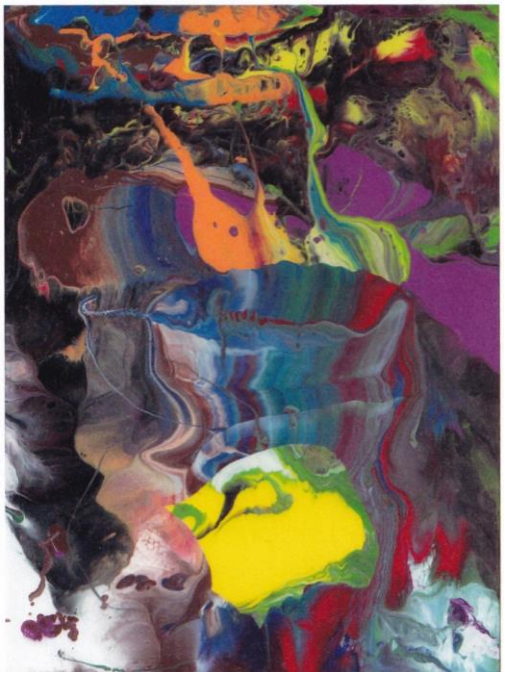
Gerhard Richter　　美術手帳

参考作品　1

106 枚のパネル

2007 年　680×680cm　ラッカー、アルディボンド

参考作品　2

Aladdin アラジン

2010 年　50×37cm　ラッカー、ガラス、アルディボンド